

女性技術者のさらなる活躍に向けた私の思い

四国通建株式会社
NTT 事業本部 アクセス部
山田 菜緒さん

1. はじめに

今年2022年は、入社してから10年目という節目の年です。

長いようであっという間に過ぎ去った9年間の出来事、そしてこれから迎えていく10年目、20年目という節目に向けての目標などをご紹介しますと思います。

2. 入社のきっかけ

地元の工業高校に通っていた当時、情報・通信系を専攻していたこともあり学んでいたことを深めていける仕事につきたいと思っていました。

進路指導の担当教諭から「四国通建という会社があって、今まで女性を採用していなかったが、女性も活躍していける会社にしていきたいと思っているそうだ。今年は大卒の女性を2名ほど技術者として採用したので、高卒もぜひとも募集したいと言ってくれているがどうだ？」と提案を受けましたが、当初はどんな会社かもよく分かっていませんでした。

そんな折、地元企業を紹介しているTV番組があり、四国通建が紹介されていた回を進路指導の一環で観る機会がありました。内容はSO工事をしている社員に焦点を当て、日頃どんな作業をしているのかを紹介しているもので、具体的には昇柱したり、ドロップを張ったり、お客様宅に訪問し通線して開通工事を実施するといったものでした。

それをみて、「カッコいいな！私もしてみたいな」と感じたことで四国通建に入りたいという気持ちが大きく



山田 菜緒さん

なり、応募することとしました。その後の入社面接で無事採用され、今に至ります。

3. 初めての女性技術者

私を含めた3名が会社として初めての女性技術者ということで、初めは本社の方はもちろん、現場事務所の先輩方そして私達自身も手探りの状態でスタートしました。

2名がアクセス部、1名がネットワーク部へ配属となり、私はもう1名と一緒にアクセス部へ配属となりました。最初の1年間はOJT期間として、光の接続班やメタルの所内試験担当など、さまざまな担当へ1～3カ月おきに異動しながら、まずはどういった仕事を行っているのか体感しながら研修を実施していただきました。

この時、念願だった昇柱作業や光の接続等を学ぶ機会をいただけてとても楽しく研修を受けることができましたが、それと同時に作業はとても難しく覚えることがとても大変でした。

光の接続班で研修していた際に先輩が練習台として模擬設備を作ってください、時間ができた時に光のクロージャを1人で付けられるまで指導していただきました。何度も付けたり外したりしながら、工法書を見ずに1人で取り付けることができた時は本当に嬉しかったです。また、高品質でかつスピーディに作業されている先輩方に対して尊敬と憧れを抱きました。

教えてくださった先輩方や協力会社の方は、女性の私が班に来たことで何かと気を遣っていただくことが多く仕事のしづらさを感じていたと思いますが、女性だからといわず男性社員と同じように厳しく仕事を教えてくださったのでとても感謝しています。

ですが、中には「女性になんてできるわけがない」「こんな力仕事を女性に任せられない」「どうせ結婚したら辞める」といった声があったことも事実です。

昔から職人として業務に従事してきた先輩方からしてみれば「自分たちのテリトリーに女性を入れたくない」というプライドや「女性は非力だから自分たちと同じように仕事はできない」という固定概念があったのだと思います。

確かに女性は男性に比べ力も弱いのでそう思うのは当然だと痛感していますが、当時はそういった声や目を向けられとても肩身の狭い思いをしていました。そんな時、同じ女性技術者である2名の同期と励まし合っていたことが心の支えとなりました。

4. 初めての配属先での苦労

OJT期間が終わり、私が配属されたのは光の所内試験担当でした。OTDRを使用した接続試験やBEWなどの開通試験、小さな規模ですが接続切替試験などを1年半ほど実施しました。

所内試験担当をしていて技術的なことでも大変なことは多くありましたが、それ以外で大変だったのはトイレです。

大きなビル内にあれば整備されているので何の問題もありませんが、山奥にポツンとある局舎やトイレがあっても外に備え付けられ整備されていないところであれば、使いたくないなと思うことが多々ありました。そう

いった時は、現場で作業している方に少しだけ時間をもらって近くのコンビニやお店等に行ってお店などが何も無い時は我慢していたことが多かったです。

こういった問題に直面したときに、女性がこの仕事につきにくい理由の1つなのかなと実感しました。昨今通信建設会社だけでなく、NTT様も含め女性技術者が増えているため、小さいことですがこういったところが整備されれば、女性だけでなく男性も安心して仕事ができるのではないかと思います。

5. 保守担当へ異動

3年目の夏頃、保守協業が開始されたため、光の所内試験担当からアクセス保守担当へ異動しました。

異動してすぐの主な業務は、道路占用許可等の整備・管理業務だけでしたが、異動して7年経った今では支障移転受付業務・共架受付業務なども増え、多忙な日々を送っています。また、たまにはありますが故障対応で所内へ入り線番切替も実施しています（写真1）。

今担当している占用許可の整備や支障移転等の受付業務は簡単のように見えますが、1つひとつの業務が細かい作業が多くとても大変なものです。

例をあげると、年度末には占用許可の更新作業があり



写真1 線番切替作業中

ます。膨大な量の許可書とOptosの図面やDBの数量等が合っているかをチェックし、許可書と現地の設備が相違ないか調査を実施して申請書を作成しています。

前年度は、1月末の提出に向けて準備を10月から始めましたが、例年の倍以上と申請数が多かったこともあり他の仕事に手がつけられないほど忙しく、締め切りに間に合うのか不安なほどでした（写真2）。

無事にすべての申請書を提出し終わった後は安堵しましたが、更新許可がおりた後の許可書の整理やOptosのDB整備等があるため、現在その処理に追われています。

数年前までは、同期の女性技術者と私の2名体制で申請書の作成業務を行っていましたが、女性技術者の後輩

も増え、現在では3名で他の業務と並行しながら作業を実施しています。細かい作業で本当に大変ですが、とてもやりがいのある業務だと思っています。

6. 女性技術者が増えたことで変わったこと

四国通建では、ここ数年で女性技術者が増えてきました（写真3）。女性の後輩ができて大変嬉しく思います。入社当初は肩身の狭い思いをすることも多く、このまま後輩が増えても大丈夫なのかと心配していた部分もありましたが、今は会社の体制や男性社員の考え方がどんどん変わってきているのでその必要がなくなったと思っています。入社当初いわれていた「女性に仕事を任せられない」といった声を今では聞かなくなりました。結婚したら退職、妊娠したら退職という風潮もなくなっていると感じています。

同期入社した女性技術者の2人は結婚しても仕事を続けています。

1人は産前産後休暇・育児休暇を取得し仕事復帰もしていて、一緒に保守担当へ配属された女性技術者は現在、育児休暇を取得しています。育児休暇を取得する際、事務所内の人達へ挨拶をして回っている同期入社の仲間に対し、お祝いの言葉はあってもネガティブな言葉はまったくありませんでした。そういったところを見て



写真2 前年度の更新許可書の一部です！

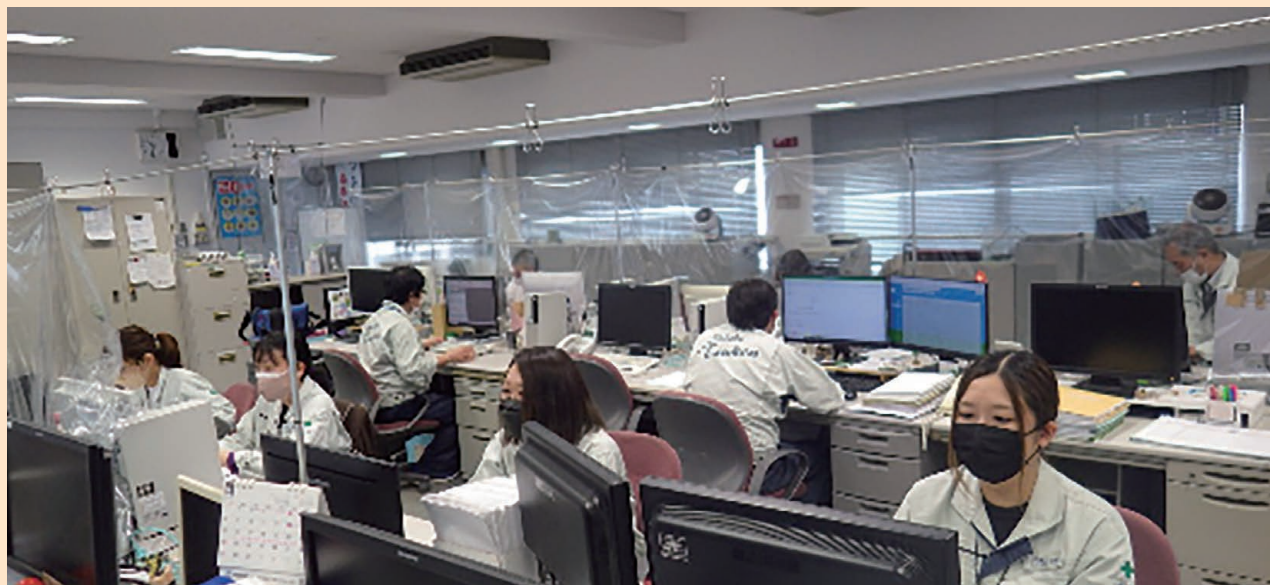


写真3 画面手前右が山田社員（撮影時のみスクリーンを外しております）

も、産前産後休暇・育児休暇に対して取得することが当たり前になっていて、少しずつ会社の中の意識が変わってきているんだなと感じています。

今は同期入社の仲間が安心して休めるよう、後輩の女性技術者と二人三脚で頑張っています。作業量が増え負担を掛けてしまっていますが、今まで以上に頑張ってくれていてとても助かっています。

私の身近なところだけではなく、会社全体を見ても女性社員の産前産後休暇・育児休暇の取得が増えていると思います。女性だけではなく男性社員の育児休暇取得ももっと増えていったらいいなと思っています。

7. これからのこと

最初の肩身の狭い時期から仕事を10年間続けられたのは、周りの男性社員の理解と女性技術者たちの仕事に対する頑張り、そして会社が女性も働いていきやすい環境を整えて来たからだと思います。10年でここまで変わったのだから、さらに10年、20年後には女性が活躍できると謳わなくても、それが当たり前になっていけるのではないかと思います。

実現させるためには、私たち女性技術者が良くするにはどうしたらいいか意見を出したり、女性からだけではなく周りの男性社員や女性技術者を部下に持つ上司の声をどんどん取り入れていくしかないと思います。

今はコロナ禍で開催されていませんが、数年前まで定期的に全国の通信建設会社から女性技術者を集めての座談会が開催されていました。一度だけ私も参加させていただきましたが、その時にも上記のような意見を取り入れて行くことが大事だと皆さんと意見を出し合ったことを覚えています。

女性だから男性だからという言葉は時代錯誤のように感じています。女性だから男性だからという言葉が聞かなくなることが私の願いであり目標です。

10年目といってもまだまだ若手という括りになっていますが、入社間もない時より意見が言いやすくなっていると思っています。機会は少ないですが、どんどん建設的な意見を言っていきたいと思っています。

女性が働きやすい会社ではなく、若手もベテランも男性も女性も関係なく働きやすい会社になるよう、微力ですが、これからも頑張っていきたいです。